

アイキャンプがひと廻りして

柏瀬光寿

第 12 回ダラムサラ・アイキャンプは、インドならではのアイキャンプであった。何がインドならではのかという、まずはインドでは日常茶飯事に起きる停電の問題だった。アイキャンプ初日、外来が始まって 30 分も経たないうちに突然停電となった。まあいつものことで直ぐに戻るだろう、と高を括って待っていたが待てども待てども電気は復旧せず。外では 200 人を超える患者さんが今か今かと待っており、少し焦り始めたころ、原因は発電所の定期検査で復旧まで 3 時間はかかるとの情報が電気王 Mr. Parmer から伝えられた。このまま待っていてはと思い、急遽、常設の発電機が作動する本院への大移動をして外来業務を行うことになった。ところがこれが「災い転じて福となす」で、一つの部屋ですべての診察と検査、処置を行ったため、誰が何をしているのか一気に見渡すことができ、とてもスムーズに外来業務が行えた。次はインドでは日常茶飯事に起きる水不足であった。常宿としているペマタン・ゲストハウスで水が出ずに熱湯コマーシャルが如く試練を強いられたメンバーが何人かいた。マネージャーとスッタモンダして事が良からぬ方向へ向かうも、小川君の素晴らしい仲介により最終的にはオーナーと上手く話が付き、まさに「災い転じて福となす」、次回からも定宿としてしかも VIP 待遇(?)で泊まる事が出来るようになった。やはりインド、一筋縄ではいかないものだ！今回も起きたさまざまな問題を智慧を絞ってそれらを見事に克服した“チーム岡田 JAPAN”の精鋭は、世界から集まった猛者の 12 名だった。それぞれが各々の役割を積極的に担ったお蔭で、スムーズかつ機能的に外来診療および手術が遂行された。突然起こった問題を皆で解決する楽しさや愉快的な仲間たちとの素晴らしい時間がアイキャンプを虜にする要因でもある。そんなアイキャンプも今回で 12 回目、つまりひと廻りしたことになる。そこで今回は、今までのアイキャンプを振り返りながら今後の展望を考え

てみたい。

チベット・フレンドシップ波百流の代表である上田苑江さんから「インドの山奥に亡命しているチベット人が目で困っているのを、力を貸してもらえないか。」という依頼から始まった2000年の第1回アイキャンプ。日本から持ち込んだ手術用顕微鏡がインディラ・ガンジー国際空港の税関で引っ掛かり、どうにか出来ないかチベット亡命政府や日本大使館に駆け込むも問題は解決せず。インドという国の事情やチベット人という国がない民族の微妙な立場など、あらゆることが我々の知識や想像を超えており「暗中模索」「五里霧中」という四字熟語がピッタリな状況だった。果たしてアイキャンプは行えるのかという不安に苛まれたのは私だけでは無かった筈だ。結局、空港で足止めを食らった顕微鏡は諦めて同行したネパール人OAの気転によりインドのディーラーとコンタクトを取り、顕微鏡を借りることに成功。そのお蔭で第1回目の最初のアイキャンプは行うことが出来た。発起人として東奔西走し疲れ切っていた上田さんの苦勞・心勞は測り知れぬものがあっただろう。そんな中、日本大使館前で大使館員を待っている間、蝶の舞いの如く優雅に体操をしていた若かりし安嶋さんの姿は、重い空気に注がれた清涼飲料水のような安らぎを感じたことが忘れられない。その時の他のメンバーとして、波百流からは川邨ナース、AOCAからは飽浦先生と籠谷先生、そして私とネパール人OAが名を連ねた。当時の患者さんの多くは亡命チベット人1世で、チベットで政治犯として収監され拷問として電気棒で殴られ足は切断、目は電撃白内障になった尼さんや拷問による治療不可能な眼外傷、10歳くらいの子坊主さんの白内障、チベットから冬のヒマラヤを越えて亡命してきて、こちら側に着いた時に見えなくなっていたという黄斑変性（雪の反射により焼けてしまった!?)など、日本では診たことも聞いたこともない疾患で溢れていた。また患者さんから聞く話は耳を覆いたくなるような悲惨なことばかりで、ラサを中心としたチベット自治区がどれほどひどい状態になっているのか初めて身近に知ることとなった。当時の患者数は、チベット人：インド人=9：1くらい

と圧倒的にチベット人が多かったが、今では2:8くらいとインド人が逆転し、それに伴い当初のようにビックリするような眼疾患を抱えた患者さんもほとんど見る事が無くなった。

アイキャンプにおける数々の進化は、第1回から参加しさらに1年間ダラムサラに滞在していた私にとっては感慨深いものがある。

一日に300人も400人も来る外来はまさに混沌としたインドを彷彿させる混雑ぶりであったが、年を経るごとに日本人とDelek病院のスタッフの英知が結集され番号札の導入や混雑緩和のため入場者数の制限をすることにより、インドにしては整然と患者さんが待つようになった。

また顕微鏡は、最初のアイキャンプで我々を助けてくれたインド人ディーラーとは手を切り(世界最強の商人であるインド人ビジネスマンというものを分からせてくれた意味では感謝している)他のディーラーを見つけるも、自分たちでデリーから顕微鏡とエンジニアと一緒に車に乗せて来なくてはならなかったため、ダラムサラ到着が深夜の1~2時になるのは当たり前であった。そして翌日からスタートするアイキャンプでは、旅の疲れを感じている暇がないほど忙しく、その疲れが帰国後に一気に出るという状況を繰り返していた。しかし第7回くらいからDelek病院が顕微鏡のアレンジをしてくれるようになり、我々は移動に専念(14時間の車中、ただ喋って寝ているだけだが)し、夕方にダラムサラ到着後はレストランでIndian chemical beerで乾杯が出来るほど余裕ができ、精神的・肉体的余裕が取れるようになった。また薬品や手術に必要な物品の調達も同様にDelek側で行ってくれるようになり、我々の負担は大いに軽減された。

カウンターパートナーであり地元の名士の集まりであるロータリークラブのメンバーは、TVや新聞などのマスメディアや宣伝カーを使ってのアイキャンプの広報活動や診察中の通訳のみならず、アイキャンプ以外の部分で問題が生じた時に相談・解決に奔走してくださり、我々にとって強い味方である。またWelcome Partyではまるで友達を

迎えるかのように私達を歓迎してくれ、日本からは安嶋さんの踊りや山名先生の酔っ払いぶりを披露し、毎年楽しい時間を過ごさせて頂いている。

ダラムサラ唯一の眼科医として孤軍奮闘中の Dr. Raman Puri (Zonal 病院) もスクリーニング・キャンプを行って白内障患者の発掘をしてくれており、「俺もチームの一員だ！」と胸を張って言ってくれることが嬉しい。

また忘れてはいけないのが世界初のチベット医である小川康君の存在である。2002年から1年間、私が現地に滞在していたときからアイキャンプに加わり、現地でのコーディネーター&通訳として我々を強力にサポートをしてくれた。また当時、学生として在籍していたメン・ツィーカン(チベット伝統医学占星術学校)の生徒と先生に手術を見学してもらい良い意味で衝撃を与える(貧血で倒れる生徒もいた)とともに、それまで決して良好な関係とはいえなかった Delek 病院との架け橋として大いに貢献してくれた。他にも、20年以上ダラムサラに居を構えて我々の活動に陽に影に支えてくださる中原一博さん(ダライラマ法王のベッドや数々の仏塔を設計された建築家かつルンタ・プロジェクトのオーナー)やマリアさん(ダライラマ法王の日本語の通訳)、日本食レストラン「ルンタ」の山崎直子さんの存在も忘れてはならないと思う。

毎年、日本から多くの医師・看護師・MR・サポーターがアイキャンプに参加して、ともにアイキャンプ成功のために奮闘してきた。辛いことも楽しいこともたくさんあったが誰ひとり愚痴をこぼすことなく笑顔で長きにやっけてこられたのは、皆をひとつにまとめそこに座っているだけで皆を安心させる籠谷先生と昼食もとらずに朝から深夜までオペ室で働き続けた鉄人ナース川邨さん、誰よりチベット人を愛し誰よりもこのアイキャンプに思いを募らせ、そして日本語しか話せないのに誰よりもチベット人やインド人から愛された安嶋さん、この3方の存在の大きさとたっぷりの愛情のお蔭であると心より感謝している。有難うございました。

昨年よりダラムサラ隊は、岡田先生率いる“チーム岡田 JAPAN”となり、顔触れが変

わりチームの雰囲気も変わってきた。また、亡命チベット人も多くが2世、3世となり彼らの状況も様子も変わったのと同様に、我々が彼らに抱く想いも変化してきたことは必然であり致し方ないことだと思う。12年間でむしやらにやってきたアイキャンプは、その実績からダラムサラに根付きそして地元の人達から信頼を得ることができたと確信している。その一方で、我々は「現地のことは現地で解決する」つまり「チベット人とインド人のこと（眼科医療）は彼らの手で解決できるようにする」というゴール向かって進んでいかななくてはならないのだが、彼らが抱える様々な特殊な事情ゆえに光明が見出せていないのが実情だ。その第一の理由が、チベット人は亡命者であり国がないということだ。現在のダラムラサは仮の宿のようなものであるが、本来の故郷であるチベット本土での独立・自治は情勢を鑑みても極めて難しい状況である。それゆえにダラムサラに定住して生活するより、より高収入が見込めるアメリカや欧州への移住を望むチベット人が多い。同様にチベット人内に眼科医を育てたとしてもダラムサラに戻ってくる可能性は低く、ネパールのようにという訳にはいかないと思われる。ちなみに海外へ移住するチベット人ドクターは多く、Delek 病院で生涯医師として過ごしている Dr. Tsetan は稀有な存在である。以上より、我々が目指す最終目標の達成は、極めて険しい道のりであると考えざるをえない。

私はダラムサラにおけるアイキャンプが大好きであり、ライフワークのひとつでもある。ゆえにチベット人とインド人のため、アイキャンプの楽しさや素晴らしさを多くの日本人（ドクターも看護師も、その他の方にも）に知ってもらうため、そして自分のために、身体と家族が許す限り参加し続けたい。ゴールを険しくともいつかは達する事が出来ると信じ、今後も歩を進めていきたいと思えます。有難うございました。合掌。